研究授業報告

10月12日(水)6限	校内授業研	学年教科	2年 国語
授業者	協力者	指導助言者	司会・記録
高橋 舞 教諭			井田 由紀 教諭 釘宮 里枝 教諭
学習内容	いにしえの心を訪ねる 「『平家物語』 「扇の的」「敦盛の最期」」 『平家物語』の人物の心情に迫れ!～人物列伝を作成しよう～		
本時のねらい	古典の現代に通ずる部分を、「那須与一」「熊谷次郎直実」「敦盛」の人物の心の「表」と「裏」を読むことを通して，当時の人々（武士）の心情に寄り添いながら、迫ることができる。		
「問い」 を生み出す工夫	・「那須与一」「熊谷次郎直実」「敦盛」の心の共通点を追求する。 ・当時の人々（武士）の心情で現代の私たちが共感できることはあるか自分自身を振り返って考えを記述する。		
協議の柱	授業者が設定した「問い」を生み出す工夫は、学習者の主体性につながったか。 【国語科】3人の武士の心情の対比が読み深め・共感に有効であったか。		

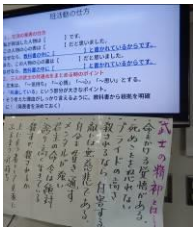
【授業の様子】

授業前に漢字の学習に取り組みます。

帯活動①これまでの学習を確認し合う活動をします。

帯活動②音読に取り組みます。

本時で取り組むことを明確にします。



自分が考えたことを共有します。

人物の「表」と「裏」について考えを整理する。

事後研報告

協議の柱	「問い」を生み出す工夫は、学習者の主体性につながったか。 【国語科】3人の武士の心情の対比が読み取り、共感に有効であったか。

【授業者の振り返り】

生徒は、説明的文章の読み取りに対して得意と感じている。また、「物語文」や「漢字・語句・文法」など高い関心を示している。しかし「古典」に対しては、そうではないことがアンケートよりわかる。行間を読む、行動から感情を読むといったことに苦手意識を感じているからだと推察される。そこで、今回の指導では、音読や語句の知識よりも、文言から心情を想像して登場人物と気持ちに共感することに重きを置いている。

・今回、人物の心情に迫るにあたり「表」と「裏」という言葉を選び、惹きつけ、深く考えさせることを目指した。他には、「美しさ」と「醜さ」などの意見もでた。

・今回 chromebook を使うことが効果的な話し合いの道具として適切だったかは不安である。CBの操作に気をとられ、話し合いの阻害につながらないよう、上手に使っていく方法を模索していきたい。

【質問】

質問	回答
どの程度まで迫ることができれば、ねらいを達成できたと考えているのか。	教科書の文言から根拠を読みとることができてればねらいが達成できたと判断している。その結果、共感できるや共感できないのどちらでも問題はない。
「武士の精神とは何か」について何回目の授業から扱ったのか。	武士の精神については、2 時間目からである。 1 時間目は音読、2時間目は、内容理解を行った。 2時間目の感想で着目した「武士の卑劣さや残酷さ」をもとに3時間目「武士の精神」に迫る学習を重ねた。この経験が「表」と「裏」に迫ることにつながったと考える。
導入の時間、生徒が進めていく時間があったが、いつから行っているのか?また、この活動の目的は何か。	授業の一部でも生徒がつくる場面を作りたいと考え単元を通して行っている。内容は、①漢字ノート、②フラッシュカード、③前回のふりかえり、④今日の流れ（7～10分）に 7 分～10 分の時間をあてている
今日の授業の流れは、どうやって決めているのか。	今回は、教員が作成した。単元計画や授業の流れを生徒とつくる取組もしてみたい。
最後の活動は、「思・判・表」と「主体性」の評価か	思・判・表②で評価する。
研究部への質問 研究の方向性として、「問いを生み出す工夫」によって主体性をどうとらえているのか	主体性を生み出しているかどうかは、知識を活用したり、多様な思考・判断・表現したりするという生徒の変容が見られるかどうかだと考えている。 主体性を生み出すことを考える上では、教科の特性を無視できないので、本年度は、「問いを生み出す工夫」として設定している。 今後の検討課題である。

【グループ協議】

A 班 〇文章を根拠にしながら心情理解が進んでいた。 〇生徒自身で授業が進んでいく（導入）姿が見られてよかった。 △考えを述べた生徒に質問する時間を十分に確保すると、より深まった考えになると感じた。
B 班 〇導入の生徒の活躍がよい。 〇前時からのつながり、ふりかえりからの次時へのつながりがうまくできていた。 △めあてが「問いを生み出す工夫」につながっているかは、若干疑問が残る
C 班 〇生徒の力を使って授業を進める導入は、意欲を喚起する面において効果的であると感じる。 △ホワイトボードではなく、ジャムボードの中で、共通点を提示する方法も考えられる。 △根拠を挙げることはできていたが、理由づけをでてきていない。より論理的な思考に迫っていくために、 　理由付けを意識することについて教科領域を超えて取り組むことが必要と感じた。
D 班 〇生徒が問いを引き受け、しっかり考えようとする姿が見られた。 △1時間の中で評価を2つ行うのは難しいと感じた。

【寄せられた感想】※ふりかえりをもとに

音から入り書く活動につなげるという流れは英語の授業と共通点を感じた。テンポがあってよかった。 導入等、生徒を全面に出して活躍させるという授業者の意図が伝わってきた。 授業方法は教科によりいろいろあって良いと思う。このような工夫をもっと交流していきたい。 生徒は振り返りを通して、次の時間の見通しを立てていた。 既習学習を板書や掲示で活用しているところが参考になった。 生徒は「表」と「裏」という視点を受け止めることができていた、視点を押さえたことで心情に迫りやすかった。 めあてや本時の流れといった最初の時間を生徒が進めていくことが新鮮たっだ。 課題の提示や論理的な説明の手立てなど，考える視点をいただいた。 複数の人物の立場を想像し,対比し,最後に自分事として考えさせるという流れが道徳教育によく似ている。 試行錯誤しながら「表」と「裏」という言葉を選んだおかげで、生徒に思考を促させるのに有効だった。課題が生徒から出てくるともっとよかった。 思考・判断・表現の指導の場面で主体性を引き出す授業であり、3観点のつながりを考えるきっかけになった。 黒板に掲示したホワイトボードで他者の意見を確認しながら自分の考えをまとめる作業は、考えを持つことが苦手とする生徒にとって支援となっていた。 ジャムボードを取り扱う部分や論理的思考力を育むための手法などについて研鑽を深めたい。 学習委員や国語係に仕事を与えて導入を進める方法は、とても良いと思いました。 生徒主体を追究した授業スタイルだったと思う。ただ、授業者の語り、言葉も多く交える場面も大事だと思う。